

2021年5月9日 礼拝説教要旨

詩編講解説教60「傷を癒される神」

詩編60：3～7、1ペトロ2：23～25

詩編第60編について多くの注解書が口を揃えて述べているのは、この詩編は「敗北の歌」であるということです。戦いに敗れた民の嘆きがここにあります。しかし例によりましてこの詩編の表題を見ると次のようにあります。「ダビデがアラム・ナハラיםおよびツォバのアラムと戦い、ヨアブが帰ってきて塩の谷で一萬二千人のエドム人を討ち取ったとき」(2節) この話と思われる箇所はサムエル記下第8章にあります。これはダビデの勝利の話で、この詩の内容と異なると思われるかもしれません。けれども8節以下のところに地名が並んでいます。「わたしは喜び勇んでシケムを分配しよう。スコトの野を測量しよう。ギレアドはわたしのもの、マナセもわたしのもの、エフライムはわたしの頭の兜、ユダはわたしの采配、モアブはわたしのたらい。エドムにわたしの履物を投げ、ペリシテにわたしの叫びを響かせよう」(8～10節) これら土地はダビデが後に支配した領域を指しています。ですからここを読むと確かにこれは勝利の歌となるのかもしれませんが、しかし、今日読んだところを含め第60編は全体的に敗北感が漂うのです。この敗北というものを理解することが、この詩を読む上でとても重要なのではないかと思うのです。

この敗北とは何を意味しているのか。ダビデのことを考えてみますと、通常ダビデは百戦錬磨で全く落ち度がないイメージがあります。しかし、やはりダビデと言えば、自分の部下を殺してその妻を奪うという大罪を犯しました。この事件はダビデにとって大きな敗北であったと捉えることができます。誘惑に負けたのであります。人生最大の汚点。そういう傷と申しますか、苦い経験というものは誰にでもあると思います。そういう過去を引きずりながら、思い出すたびに胸が苦しくなるような、古傷が痛むような経験を誰もが抱えているのであります。この詩は表題にあるようなただ勝利の歌ではなく、敗北を見つめる中でこそ見えてくる本当の勝利というものに気づかせようとしているのではないかと思います。

もう少しダビデのことを考えてみましょう。「あなたは大地を揺るがせ、打ち砕かれた。どうか砕かれたところを癒してください」(4節) ここには地震と地割れの表現があります。「打ち砕かれた」という部分は「割く」という意味の言葉です。二つに分かれてしまう。ここはダビデ自身の経験、苦い過去というものを示しているように思うのです。それはサウルとの確執であります。ダビデにしてみれば、一方的にサウルから憎まれてしまうわけで、災難であったわけですが、結果としてイスラエルの国はサウル家とダビデ家に分裂するような形になってしまいました。そこを外国の勢力が狙うようになり、サウルは最後ペリシテ軍によって殺されてしまいました。その時にダビデの親友であったヨナタン、彼はサウルの息子であります。彼も死にました。サウルと親友ヨナタンの死を知ったダビデはイスラエルの家を悼んで泣き断食したと聖書にあります。

この涙はどういう涙だったのか。ダビデにとってサウルとヨナタンのことは悔やんでも悔やみきれないことだったと思います。サウルの一方的な敵意によってダビデは窮地に立たされました。その点から言えばサウルはダビデにとって憎しみの対象でありました。けれどもはじめダビデはサウルに仕えていたのです。サウルはダビデを気に入り、そばに置き、ダビデは豎琴を弾いてサウルの心を癒しました。お互いを必要とする。そういう親しい関係にありました。と

ころがやがてサウルはその妬みゆえにダビデを憎むようになってしまう。聖書には「悪霊が激しくサウルに降り、ものに取りつかれた状態に陥れた」(サムエル記上18:10)とあります。そこにサウルの狂気の原因があります。それゆえにダビデは身の危険を感じてサウルのもとを離れてしまう。しかしここにダビデの後悔があったのではないか。なぜサウルのもとに留まり続けることができなかつたのか。どうして自分は逃げてしまったのか。最後に二人が歩み寄る話がありますが、時すでに遅し、サウルはそのあとペリシテとの戦いで死んでいくのです。親友ヨナタンも失う。これはダビデにとって心残り以外の何ものでもないと思います。

一度壊れてしまった関係を修復する術をダビデは持っていませんでした。そこに人間の限界があります。これがまさに敗北ということではないでしょうか。そういう破れを抱えながらわたしたちは生きています。自分ではどうすることもできない。そういう破れ、敗北感を抱えています。人間関係だけではない。死という現実、これもどうすることもできない。死はわたしたちのあらゆる関係を引き裂きます。人間はそこで完全に敗北するのです。

けれども、その敗北の中に勝利を見る。それが信仰です。「どうか我らを立ち帰らせてください」(3節)「どうか砕かれたところを癒してください」(4節)「あなたの愛する人々が助け出されるように右の御手でお救いください」(7節)この切なる祈りを神さまは聞き入れてくださいました。この敗北の涙を受け止め、裂かれた傷を癒してくださるのです。イエス・キリストはそのため十字架で死なれ三日目によみがえられました。「あなたは御自分の民に辛苦を思い知らせ、よろめき倒れるほど、辛苦の酒を飲ませられました」(5節)この「辛苦の酒」は神さまの裁きを表しています。しかしその裁きを主は御自身が引き受けられました。辛苦の酒をあ最後の晩餐において主ご自身が飲み干してくださったのです。そしてあの十字架の上で「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」と叫ばれた。それは、罪ゆえにわたしたちが負わなければならなかつた神さまとの深い亀裂、打ち砕かれた関係をキリストが負ってくださったことに他なりません。わたしたちにはどうすることもできない敗北をキリストが担われそして復活されました。だからこそ、わたしたちはそこに希望を持つことができるのです。神さまはその愛する人を助け出されます。どんな敗北の中にあってもわたしたちは神さまの勝利を信じて歩むことができます。